

松任谷正隆の

僕のひとりごと

04

VOL.04 100のウソ

僕が小学校低学年の頃、つまり、まだ1950年代の話だ。

気がつくと、新しい家が何軒か建っていた。とはいえ、まだ我が家の前は畑。
新しい家は門を出て右に100メートルくらい行ったところだったか。
はて、家が出来る前はどうなっていたのだろう。やっぱり畑だったのか？

新しい家は4軒くらい。
どれも古い我が家に比べればずっとモダンで、
そのうちの1軒にはガレージがあってクルマがあった。
いったいどんな人が住む家なんだろう、と思っていたら、
たぶん挨拶に来たんだろう。
僕と同じ年くらいの女の子がいることがわかった。
たしか淳子ちゃんという名前だった。
あれ、違ったかな？ まあいい。



淳子ちゃんは青山学院に通っていた。青学の制服はブレザーでなんだかおしゃれだ。
僕のダサい制服とは比べものにならない。クルマを持っているせいか、やたら気取っているように思えた。
親同士がなんだか仲良くなり、必然的に淳子ちゃんはうちに入り浸るようになった。
知れば知るほど生意気なやつで、なにかにつけ、今で言うマウンティングをとりたがった。
古い家に対して新しい家。クルマも免許もない家に対してクルマもガレージもある家。
それと、これは確認してはいないのだが、くみ取り式のトイレの家に対して(たぶん)水洗式トイレの家。
僕が不利なのは明らかだった。だいいち、口が立つのは女の子の方だ。必ず言い負かされた。
それが僕の得意なピアノであっても、だ。

女の子は好きになるもの、ではなく、僕にとっては負けたくないもの、になった。
歳を取った今でも僕の中にはそういうところがある。負けるものか。
とはいえ、ひっくり返ってもかなわないところがあった。
それは彼女がクリスチャンネームを持っているところだ。
クリスだかベティだか忘れたけれど、淳子の前にその名前が付く。
それが子供心にやたらカッコ良く響いたのだ。

どうやらお父さんだかお母さんだかがアメリカ籍を持っており、
どちらでも選べたらしい。
しかも、生まれたのがアメリカからの船の上とかで、
船の中で洗礼を受けたのだという。
ちくしょう。なんだよ、それ。



負けたくなかった僕は咄嗟にとんでもないウソをついた。
僕なんておじいちゃんがロシア人とのハーフだもん。
もちろん、僕の祖父は2人とも生粋の日本人である。
なぜロシア人かと言えば、母親がボリショイバレエのファンで、何かというと
ロシア人は綺麗だ、ロシア人はハンサムだ、と言っていたからだと思う。
しかしそこは淳子ちゃん。すぐに僕の母親に聞いたです。
一番やって欲しくないことだ。母親は「何それ？」なんて言う。
そして僕は淳子ちゃんにこう言うのだ。
「母親はハーフであることが恥ずかしいんだ」

こうして僕はひとつのウソを正当化するために少なくとも100のウソをついたと思う。
今となって思えば、これが音楽家として大事な、妄想をする、
という行為を育てたのである。 いや、そう信じたい。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy